

令和7年度 園評価書

園番号 27 園名 富士見台こども園

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A : よくできている B : 概ねできている、C : あまりできていない、D : できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
心豊かにいっぱい遊ぶ子	「やりたい」を伝え、共に遊ぶ子	子どもたちは“やりたい！”と思える遊びに出会い、自ら進んで遊びを楽しんでいる	子どもが遊びを探そうとしたり、見つけたりして遊び出している。毎週のわくわく会議では園庭の使用時間の調整や環境の再構成を考えたが、子どもの興味関心の動向を先読みする難しさがあった。園庭で可動遊具を組み立てたり、散歩先で収集した自然物を見立て遊びや工作に活かしたり、“やりたい”と子どもが主体的に楽しんでいた	A	A	・学校も同様に子どもの自己主張の受け止めについて、応えきれない難しさを感じている。様々な表れがあり、受け止めていくにはマンパワーが必要	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス担任間の保育の振り回り時間を増やし、日々変化する子どもの興味関心を先読みした環境の準備を職員が話し合い、連携して実施する ・保育教諭だけでなく、子どもと一緒に道具や教材等の使い方を考え、遊びに活かす ・子どもの発達や興味関心を捉えられるように、室内の保育環境を見合う機会を作ったり、里山や、可動遊具を活かした園庭の整備を考え合ったりして職員間の連携を深めていく ・保育教諭が子どもが安心してできるまで思いに寄り添い続け、受け止めていくが、社会生活の中では思い通りにいかないこと、周りの人にも思いがあることを伝えていく ・子どもが集団の中で、自分は大切にされていると感じることができる機会を作っていく ・職員全体で子どもの人権について学び合い、定期的に自身の保育を振り返る機会を作っていく
		子どもたちは興味関心をもったものや、ことを保育教諭や友達に伝え、一緒に遊んでいる	興味や関心のもち方が様々で、特に乳児組では、子どもの特性を理解し、思いを受け止め、一人一人の安全と安心を考慮して関わっていった。保育教諭や友達にありのままの姿を見せて一緒に遊んでいる。幼児組は、保育教諭と一緒に遊び楽しさに共感し、仲立ちをしていくと「いっしょにやろう」と子ども同士のつながりが増えた	A	A	・子どもが自由に遊びを楽しめる環境や関わりをしてきている	
		子どもたちは周りの人との関わりの中で、自分の思いを伝え、相手の思いを知ろうとしている	相手の思いを知ろうとするが、受け止められないと感じたり、強く主張し続けたりする子どもの表れを、職員が連携して対応した。満足がいくまで受容されると気持ちを切り替えられる時間が増えた。幼児組は子どもの思いを保育教諭が代弁したり、話し合いの場を増やしたりしていった。乳児組は、保育教諭の姿を見て、泣いている子を心配し優しく接する姿が見られるようになった	A	A	・園庭で大勢の子がマラソンを楽しんでいる中、年長児の姿が少なかった。その姿から年長児が自分のやりたいことに夢中になり、好きなことを楽しめる環境が整っていることが分かる	

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策 (来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	一人一人に合った関わりや環境構成について乳児、幼児会議等で共有し、乳児と乳児のつながりのある教育・保育を実施している	乳児・幼児会議やわくわく会議の中で子どもの姿を丁寧に捉えと共に、環境や関わりについて話し合いアイデアを活かして出し合う研修を実施した。また、公開保育の事前研修で各年齢の発達を押しさたり、乳児・幼児会議の報告を職員会議で行うようにしたこと乳児と幼児のつながりが意識できるようにした。幼児同士のクラスを越えた交流が少なく、異年齢交流を意識した教育保育の工夫が必要だった。	B	A	・乳児期はもちろんのこと、幼児期の個人差は大きい。子ども達の交流や職員間の密なつながりが大切である	<ul style="list-style-type: none"> ・わくわく会議の中で異年齢交流にもポイントを置いて話し合い、日常生活の中で交流ができるよう意識し、連携する ・乳児幼児会議の内容を園全体にもっと発信していくことで職員のつながりを強化する
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様なへの配慮	子どもたちのさまざまな生活リズムに配慮し、長時間保育の中で安心して過ごせるようにしている	A	A	・毎日の送迎時、早番、遅番時間だと必ずしも担任に会えるとは限らないが、少しの時間でも担任が子どもの様子を教えてくれてありがたい	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは担任間の情報共有が確実に行われるよう連携する。また早遅番時の当番と担任の連絡の共有方法を見直す ・早遅番時の子どもの姿を、早遅番担当職員の気づき、担任の思い等を伝え合って、環境の見直しを行う ・幼児組は登園時間の呼びかけを行い、生活リズムの改善や遊びの充実につなげていく
		(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの発見、疑問、喜びの出会いを捉え、“やりたい！”“こうしたくなる？”と試したり、繰り返したりする環境を作っている	わくわく会議を継続して行うことで、子どもの姿を捉え、話し合いながら環境を考えていく風土が定着したが、子どもの姿を予想したり、保育教諭の願いと子どもの主体性を意識した環境の再構成や、タイムリーに伝えていく難しさを感じた。しかし、それぞれの職員が子どもの“やりたい”をキャッチしようと意識したり、自身の思いや悩みを発信したりしながら環境構成できた。	B	A	・保護者同士に様々な方がいて、コミュニケーションが取りづらいている。園側が保護者と連携を取ってきょうとしていることは伝わっている
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	毎月の訓練やヒヤリハットの共有を通して、職員一人一人が自身の役割を意識し、子どもの指導を行っている	減災の新しい知識を取り入れ、具体的に状況が設定された避難訓練を繰り返し行うことで、職員が考え判断しようとする意識が高まった。ヒヤリハットは提出件数が減少傾向だが、早急な共有が必要な事案は、その日に伝達周知できたことで、同じ事案が起こらないよう環境や関わりへの見直しにつながった。	B	A	・子どもの遊びの発展をどのように想定し、そのための環境の再構成や保育の質の向上をあけていく具体的な評価指標を、次年度の園評価に反映させてほしい	<ul style="list-style-type: none"> ・訓練の反省を早急に共有し改善点を話し合うことで、その場に応じた行動を考え、実行するスキルにつなげる ・予告なしの訓練を重ね、自分で考え判断する力をつけていく ・ヒヤリハットの事案だけでなく、防止策に重点を置いて話し合うことで同じことが起こらないようにする ・防災だよりを定期的に発信し、園での取り組みを保護者に伝え、安心につなげる ・小さい気づきを記録できる体制作り(色んな場所に記入用紙を設置する) ・年齢に応じた健康指導を行っていく(ハンカチを持ってくる、自分でリュックを背負う)
		(1)健康教育の充実	基本的な生活習慣が身に付くよう、家庭と連携し、個々に応じた経験の積み重ねを行う	乳児組はコドモンの連絡帳や送迎時の会話を通して、子どもの姿や関わりを共有することで、家庭と園が連携できた。また、自分でやることとする姿を褒めたり、できるようになったことを保護者と共有し成長を喜び合ったりできたことで、子どもや保護者の自信や意欲につながり、基本的な生活習慣の確立に前向きな様子が見られた。家庭と園だけでなく職員間でも意識の違いを感じる時もあるが、日々の動きかけが手洗いやうがいの習慣化につながった。	A	A	・認定こども園になって研修等の取り組みが、変わってきている。子ども達のため職員が資質向上を目指していることが伝わってくる。若手を巻き込んで、一層の充実を期待する
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	月1回支援児会議を行い、個々の発達、特性を職員間で共有し、支援方法を共通理解する	全職員の理解にまでは至らなかったが、支援担当者がアンパンマンの会の意味を理解した上で、会の内容等を工夫したり、反省を次回に活かしたりすることで、個々の発達や特性、支援方法の共通理解や学びにつながった。支援会議の内容やケース会議の内容を画面に伝えてくれるが、回数や報告方法の工夫が足りず、全職員の共通理解や、ケース会議を若手職員が気軽に悩みや意見を言える場にしたかったが難しさがあった。しかし、様々な職員が支援を考える機会になり、支援に悩む職員が取り残されな体制はできた。	A	A	・建物の耐震性がとても心配。今のまま震災が起きたら、どんな訓練をしていても危ない	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の方法を考え直すと共に、内容をわかりやすく発信し共有をする ・支援だけでなく全園児が過ごしやすい環境や関わりを考えていくことで支援方法の共通理解を深めていく ・特出するアンパンマンの会を減らし、クラス保育の中でできる支援を学び合う ・サポートプランを共有することで、担当以外の保育教諭が早遅番時に支援できるようにする
		(1)組織体制の充実	担当園務分掌を各自意識し、計画的に見通しをもって企画・発信し、協力し合いながら運営している	定期的に進捗状況を共有することで、他の分掌への意識が高まり積極的に取り組むことができた。また職員が多く関わる大きな行事は、進捗状況の見え方ができていたが、分掌によっては差が埋まらない。リーダーの動きかけが、分掌の機能の進退に重要な要因がある。取り組み内容を見直し、保育教諭だけでなく、子どもも一緒にできる範囲で考え、子どもが主体で行事が進められるようにしていきたい	A	A	・未就園児向けのイベントの案内は良く掲示されている
6 研修	(1)研修体制の充実	子どもの学びや育ちを多面的に10の姿で捉える。子どもたちの“もっとやりたい！”“こうしたい！”がにつながる環境構成や関わりをしている	公開保育を機に環境の工夫を入れるクラスも見られた。また園内研修の回数を増やすことで実践に活かすことができた。研修をきっかけに関わり方や環境について考えることで、子ども達の遊びが広がったり、周りに自分の思いを伝えようとする姿が増えてきている	A	A	・玄関の掲示物(ドキュメンテーション)に、子どもが遊びから何を学び、育っているのか「幼児期の終わりまでに育てたい10の姿」に照らし合わせて、分析して発信している。とても分かりやすい掲示で、園の教育・保育の方向性や、力を入れたいと取り組んでいる様子がよく伝わってくる	<ul style="list-style-type: none"> ・わくわく会議を継続する。見直しをもった園庭環境の整備や、興味関心を考え合い、園庭環境図を使って、遊びの見える化や共有を実施する ・公開保育が一種の行事にならないように、持続可能な方法で実施する。また公開保育とは違う園内研修を行う等、職員間で話し合い、環境を再構成していく
		(1)教育・保育環境の充実	子どもが“やりたい！”“もっとやりたい！”と試したり、繰り返したり、工夫したりできる環境を作っている	子どもの「やりたい」を受容した保育教諭の関わりができていた。また、興味関心を肯定的に捉える保育教諭の意識があり、自分のクラスの良さや遊びの価値を感じながら保育ができていた。保育教諭の願い、子どもの遊びがどのように発展していくかを環境構成に取り込んで、保育の質を高めていきたい	B	A	・ドキュメンテーションや毎日の配信内容について、どこにどんな育ちがあったのか、もっと具体的な発達を捉えた表示をしてほしい
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	子どもの遊びや生活の様子や園の取り組み等を、わかりやすく保護者に発信し、子どもの成長を家庭と共有している	コドモンを活用して、写真やエピソードを配信した。保護者からも「写真が嬉しい」との声を頂いている。季節ごとや行事のドキュメンテーションも掲示し、園での取り組みや、子どもの遊びを幼児期の終わりまでに育てたい10の姿に照らし合わせて、遊びの中にある学びを保護者に理解してもらったことができた。	A	A	・各種の訓練は、いつ何の最中に、どのように避難したのか、何を履いて移動したのか等、家庭の参考にしたいので具体的に知らせてほしい	保護者から頂いた声をもっと早急に共有したい。(運動会、参加会、発表会等のアンケートのまとめと発信)。育ちがわかる写真の撮り方や、保護者への発信の方法等の園内研修会を開き、より伝わりやすい方法を全職員で学んでいく
		(1)近隣の園との連携の推進	10の姿を通して子どもの学びを発信する。先の見通しをもった指導計画を立て、交流できる機会を作っている	12月の年長組の公開保育では、富士見小、大谷小の先生の参観があった。また、10月に駿河総合高校や支援学級の生徒と交流した。もっと子ども達が地域の人を知る機会をもちたいが、つながりが薄い。様々な年齢、職業等、普段関わりが薄い人たちの交流も意識していきたい	A	A	・次年度は富士見地区のS型テイスサービの高齢者とのふれあいを企画する。年に2〜3回を目標に地域の方の協力をいただきながら、企画運営を行う
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域にある公園、広場を園活動に活かし、近隣園との交流や地域の人との交流、情報交換を行っている。	園外保育に出かけた先で収集した自然物遊びに取り入れ、地域の資源や魅力を共有した。しかし、秋は特に行事の追われる傾向があり、園外の自然に触れる機会が少ない学年もあった。園外保育を指導計画に入れ、見直しをもって計画的に保育を進める。また子ども達に、園外で何を体験させ、どのように遊びや成長につなげるのか、明確にする必要がある	B	A	・園舎の改築とともに、職員の待遇改善や、保育体制のさらなる充実を願う	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の方に声をかけて、つながる糸口を探す。また、保育教諭も地域資源を知る機会を作っていく。(保育教諭で散歩の研修をする等) ・地域の人との関わる経験の一つとして、テイスサービ等の会を訪問し、高齢者と触れ合う機会を取り入れていく